

## 現代に生きる英学

上野景福

わたくしはここに「英学」という標題を持ち出しまして、英文学とも、英語学とも、または英語教育とも申しません。この英学という言葉は今では相当古くさくなり、明治的なにおいを感じる方が多いのではないかと思います。しかし一方ではリバイバルとかいって、古いものをまた持ち出してくることが、最近各方面ではやっているそうでもあります。そんなわけで、わたくしもその傾向に便乗して、こんな題をつけてみたのであります。

さて、この金沢で語学教育研究大会が催されるのは今回が初めてであります。金沢と英学、あるいは英語教育との関係は因縁をたどると、なかなか浅くないものがみられます。その第一は、桜井錠二博士(1858~1939)がこの金沢ご出身のことを挙げるべきでしょう。博士がのちに大正15年から昭和12年までの12年間の久きにわたって当研究所の理事長として研究所の育成に熱心に活躍されたことはここに改めて申し上げるまでもありますまい。

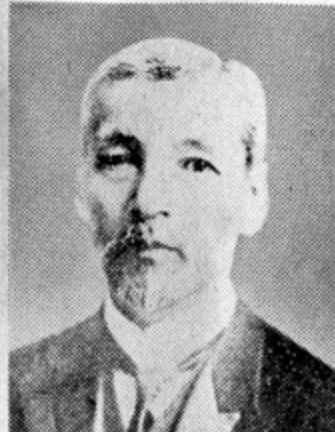
博士の伝記を調べてみますと、嘉永5年(1858年)のお生まれで、明治維新になって、明治4年(1871)に大学南校に貢進生としてはいられました。大学南校というのは、あとで述べますように、今の東京大学の前身であります。明治3年7月27日に太政官から各藩に出された達しをみますと

告

大学南校ニ於テ外国教師御雇相成人材成育被為在候間審々ニ於テ  
現高拾五万石以上 三人

同 五万石以上 二人  
同 五万石未満以下 一人  
右之通拾六歳以上二十歳マテ人材相撰来ル十月迄ニ南校へ可差出候、尤年限学費等之儀ハ南校ニテ可承合事

このように藩の大きさによって人数を決めています。金沢藩はもちろん俗に百万石といえますように、ここにいう十五万石以上に当たります。五万石を単位にして貢進生を1人ずつという制度でしたら、もっとたくさん出せたわけですが、十五万石以上はすべて3人におさえられていたのですから、ここからも3人出ています。そのうちの1人として桜井博士が出ているのです。その後明治9年(1876)に英国へ留学の途につかれました。東京大学で第1回の留学生(この中には菊地大麓、神田乃武、矢田部良吉等の名が見えています。)を明治3年に派遣したところ、非常に成績がよかったというわけで、明治9年に第2回の派遣の議が起こっています。それによると「本校本科生徒中より優秀なるものを選抜することとなり、6月19日英国に8名、仏国に2名、合計10名の派遣」(『東京帝国大学五十年史』上冊、324ページ)ということが出ていて、この英国派遣の8名の中に「英国、ロンドン、ユニベルシティー、カレーヂ 化学中級生 桜井錠二」という



(桜井錠二博士)

名が見えています。このほかには穂積陳重(当時、入江姓)、杉浦重剛、岡村輝彦というような後に各方面で活躍した人物がいっしょに英国に留学しています。

さてロンドン大学では、ウィリアムソン(Alexander William Williamson 1824~1904)という有名な有機化学の大家について化学を研究されました。その当時のことについては後にちょっと触れますが、5年の後、つまり明治14年(1881)には帰国されて、翌年には東大教授となり、明治21年には理学博士となり、さらに後には、帝国学士院長、学術研究会議議長、日本学術振興会理事長、さらに枢密顧問官等を歴任され、その功により男爵に叙せられました。その間、本研究所にとっては、先ほども触れたように長い間理事長としてこれを育て上げられたおもな方のひとりなのであります。これが金沢と英語研究とが密接な関係のある一つなのです。

もう一つは東京大学の来歴をみますと、外国語をおもに研究する教育機関であった、徳川末期の洋書調所が、一つの流れとなって現在の東京大学になっています。この大学の別名を通称赤門ということは、たとえば『広辞苑』をひいて、「赤門」の項の最後に、「東京大学の異称」と出ているのを見るまでもなく、皆さまご承知のとおりです。実にこの赤門が金沢と大いに関係があるので。本郷の赤門のそばに、小さな料理屋が戦前からあって「五万石」と名乗っているのは、おそらく赤門を百万石と感じているからでしょう。この本郷の東大の敷地は元は前田家の上屋敷だったので。今でも東大構内のほぼ中心には「御殿」という建物がありますが——御殿というときぞ立派な建築だろうと思われるかもしれませんが、これは日本国中どこへ行ってもとても類のないようなボロボロの建物です。これは皮肉や逆説で御殿と言っている

のではなく、もとここに前田家の御殿があったのだらうと思います。このそばの池を、英国の詩人のブランデンさんが詩に書いて“Daimyo's Pond”と書いています。今の学生は「三四郎池」とこの池を呼んでいますが、加賀藩主の上屋敷があったので詩人の頭には「大名の池」というイメージが強く浮んだのではないのでしょうか。

赤門というのは、徳川將軍家からお嫁さんをもたらす場合には、ただそれだけでは済まされず、あらかじめ赤門を作ってこれを迎えなければならないということがありました。11代將軍家齊の24番目の子が娘でしたが、前田家13代の齊泰(温敬公)に降嫁したので、前田家では赤門、正式の名前を御守殿門という、を作ったのです。これには格式も、もちろん、ありますが、一つにはそういう大名には金を大いに使わせるということがねらいで、そういう門を大金をかけて作らないと將軍家からお嫁さんがもらえない仕組みだったようです。その門は赤く塗るために、通称は赤門といわれているのです。つまりこのような赤門が、外国語研究機関の後裔に脈をひいている東京大学の別名になっているのですから、金沢と英学のつながりはなかなか深いものがあると言えます。

さて、外国語の勉強、外国語教育というものをどれくらい以前にわれわれの祖先は始めたものでしょうか。最近はあまり歴史的なことは考えないで、言語学のほうでも共時的というほうが勢をしめていて通時的ということは問題にしないわけではありませんが、やや影が薄くなっているようです。ただしこれからのお話は、その述語を借用すると、共時的というより通時的なことに関連が強くなりそうです。われわれの祖先が外国語を勉強したのは、まず奈良朝とか平安朝の時代から認められますが、これはもちろん西洋方面ではなく東洋方面に

限られていました。しかし当時の東洋はわれわれが今感じている西洋以上にもっと速い国であったことでしょう。それが漢文、漢学ということです。それが漢文、漢学ということとずっと続いています。

次にヨーロッパとの交渉はポルトガル人が種ガ島へ漂流して、鉄砲を日本に伝来した天文12年(1543)がその初めと考えられています。しかしそれはまだ英学の初めとは関係なく、それ以前のことで、それから家康時代になると三浦按針<sup>あきね</sup>という帰化名を持つにいたった英国人 William Adams (1564~1620) が慶長5年(1600)に日本に来て、家康の信任をえたことが歴史に出ていて、これは有名なことです。しかしこれも英学の初めではありません。日英交渉史の一コマではありまじょうが。――

三浦按針は、今は度々の町名改称であるかどうか知りませんが、以前には東京の日本橋の近くに、その名に因む按針町<sup>あきね</sup>という町名がありましたし、また按針といっしょにやってきたオランダ人でヤン・ヨーステン (Jan Joosten Loodensteijn) という人の住んでいた所が訛って八重州河岸となり、このほうは今でも東京駅の八重州口という名になって残っています。オランダ人は当時世界の七つの海にのさばっていて、わが国では鎖国後もオランダだけは交渉を持ちつづけ、西洋との窓口はオランダを通じなければならなかったことは、申し上げるまでもないでしょう。当時は蘭学という言葉があって、内容は洋学というのと同じことでした。元はといえば漢学に対して洋学とか蘭学という言葉ができたのだらうと思いますが、杉田玄白の『蘭学事始』(文化11年(1814)脱稿、文化12年(1815)補筆)もこれを表題にしています。この本の中で、「且つ社中にて誰いともなく蘭学といへる新名を首唱し、わが東方蘭州、自然と通称となるにも至れり」(岩波文庫版、35ページ)とあるのは、杉田玄白のこ

ろに蘭学という言葉が普及し始めたことを述べたものでしょう。それに対し、英学という言葉がいつごろから出たかという、これは蘭学よりだいぶ遅れています。

わが国に英学が正式に始まったのは、長崎に英国の軍艦が来たことがきっかけになっています。この軍艦がフェートン (Phaeton) 号といい、文化5年(1808)にオランダの商船を捕えるために長崎にやってきました。これは欧州の国際情勢をそのまま反映してやって来たのですが、当時日本はまだ英国との正式の国交を開いていなかったため、英国の軍艦が無断で入港し、オランダ人を人質にしたり、日本側に飲料水や食料を要求したり、その間言葉が通じないので、こちらの意志をわからせることができず、当時の幕府の方針にもとらないうので、長崎奉行の松平<sup>まつだいら</sup> 頭康英が責任を負って自殺するという事件が起きました。これが英学と関係があるというのは、その翌年、すなわち文化6年(1809)に長崎の阿蘭陀通詞<sup>あらんたつうじ</sup> に対し「魯西亞暗厄利亜文字言語修行稽古儀被命」という幕府の命令が出ているからです。実はフェートン号事件の前年にロシアの船がやはり来ていたところから、これはオランダ通詞にロシア語と英語を第2外国語として兼修することを正式に命じた辞令です。

さて、ちょっと脇道へそれますが、一般に外国の地名とか国名のついた言葉はほめた意味はなく、あまり芳ばしくないのが多いようです。そのうちでもオランダに対しては英語の中で特にこれがひどいようです。つまり Dutch のついた英語の表現、たとえば Dutch treat とか Dutch party といえば、おごつてもてなすのではなく、各自が割り勘でするやり方とかパーティのことですし、Dutch courage というのは付け元気、酒の上のから元気、Dutch concert、オランダ式の合奏というのは何かと

いうと、てんでんばらばらの合奏、Dutch uncle つまりオランダふうのおじさんというの、おじさん風を吹かすという工合に、まだいろいろとありますが、Dutch に対しては例外なくひどい意味がこめられています。もともと、外国の地名に対してこういう悪い意味をもたすのは、術語では xenophobia といいますが、Dutch に対しては少しひどすぎるようです。これというのもオランダが世界の各地に雄飛していて、そのうちに英国が頭を持ち上げてきたときに、オランダと英国との間では各地でずいぶん摩擦があったらしいのです。フェートン号の事件もこの摩擦の一つの表われといえます。こういう摩擦が idiom にも表われて国民感情を示しているものでしょう。つまり国民的なオランダに対する悪感情が英語の idiom の中に凝結したということが考えられます。わが国の英学の初めは実にこういうオランダと英国の争いのとぼちりから生まれたものなのです。

英語兼修の辞令の出た2年後、つまり文化8年(1811)には、英語をオランダ人から習った長崎のオランダ通詞、本木庄左衛門<sup>ほんきさぶさへもん</sup>などによって早くも『暗厄利亜国語和解』(写本10巻、内題には「暗厄利亜興学小筈」とある)という単語と短文を主にした英語の入門書が出ています。そしてさらにその3年あとは「文化11年(1814)英和辞書の初めともいべき『暗厄利亜語林大成』(写本15巻)というのが出ています。これでわかりますように、英語をわれわれの祖先が勉強し始めたのは、何も見栄や趣味や物好きからではなく、英国の軍艦などが来た場合、言葉ができなくては困るという外交上、国防上の必要から、実用を主にした目的で学習を始めたものです。それが1810年前後のことですから、わが国での英語学習の歴史は、ちょうど150年たったことになります。

当時は洋学としては蘭学がもちろん主として、英学は始まったといっても副としての存在でした。それから30年ほどして、天保11年(1841)には『英文鑑』(上下2冊)という本を江戸の天文方見習の淡川六蔵(敬直)という人が出しています。天文方というのは洋書を勉強して海外の新知識を得るといふ公の役目です。この『英文鑑』というのはわが国での英文法書の始めて、Lindley Murray の英文典のオランダ語訳を重訳したものです。淡川六蔵は非常な秀才で、当時まだ26~7才だったそうです。後にこの増訂版を加賀藩の藤井三郎という人が出しています。この中の下編、巻の1に「シャーケスピアール」というカタカナが出ているのがわが国でのシェイクスピア文献の最初だそうで(竹村覚『日本英学発達史』205ページ)、この意味でも興味のある文献だといえまじょう。

英学も、単なる会話や単語の勉強から、そろそろ組織的に文法と取り組む段階にきていることがわかりますが、同時に地域的には長崎に始まった英学が江戸に移ったことに意義があります。つまり英学の中心が、オランダ語の長崎から政治の中心の江戸へ移ったとみていいと思います。

蘭学から英学へと一般の傾向が移ったのは、いつごろからであるかという、これには福沢諭吉の転向ぶりを見るのが一番手っとり早いと思います。もっとも福沢諭吉はいい意味で非常に目先のきいた人でしたから、福沢の行き方が当時の一般の人々の行き方をそのまま表わしていたとは言えませんが、時勢の動きは人一倍敏感に伝えているのは確かなことです。福沢が初め大阪の緒方洪庵塾で蘭学を一生けんめいに勉強したのは安政2年(1855)、彼の22才のときからです。それから、安政5年(1858)に藩命で江戸へ出て来て、築地鉄砲洲の奥平家の中屋敷で蘭学塾を開きました。これ

が慶応義塾の元で、慶応義塾の創立百年祭はこのときを基準にして催されました。そしてその翌年の安政6年(1859)に横浜に遊びに行ったことがあります。『福翁自伝』に「英学発心」と標題がついている箇所です。

「横浜と云ふものは外国人がチラホラ来て居る丈で、堀立小屋見たやうな家が諸方にチヨイチヨイ出来て、外国人が其処に住って店を出して居る。其処へ行って見た所が一寸とも言葉が通じない。此方の云ふことも分らなければ、彼方の云ふことも勿論分らない。店の看板も読めなければ、ピンの貼紙も分らぬ。何を見ても私の知て居る文字と云ふものはない。英語だか仏語だか一向分らない。…」せっかく蘭学を長年勉強したのに対して、横浜ではさっぱり役に立たないので、福沢は大いにショックを受けたようです。「横浜から帰て、私は足の疲れではない、実に落胆して仕舞た。是れは是れはどうも仕方がない。今まで数年の間死物狂ひになって和蘭の書を読むことを勉強した、其勉強したものが、今は何にもならない。商売人の看板を見ても読むことが出来ない、左りとは誠に詰らぬ事をしたわいと、実に落胆して仕舞た。」ここで悲観するだけなら、だれにでもできることです。現に相当な人で、悲観するだけで終わってしまった人もいました。しかし福沢の偉い点は、こんなことで腰くだけにならなかったことです。「けれども、決して落胆して居られる場合でない。彼処に行かれて居る言葉、書いてある文字は、英語か仏語に相違ない。所で今世界に英語の普通に行れて居ると云ふことは予て知て居る。何でもあれは英語に違ひない、今我国では条約を結んで開けかかって居る、左すれば此後は英語が必要になるに違ひない、洋学者として英語を知らなければ迎も何にも通ずることが出来ない、此後は英語を読むより外に仕方がないと、横浜から帰た翌日だ、一度

は落胆したが同時に又新に志を發して、夫れから以来は一切万事英語と覚悟を極めて、扱其英語を学ぶと云ふことに就て如何して宜いか取付端がない。」

今と違って英語の勉強にとりつく便宜、方法もわからず大いに困ったのですが、通詞の門をたたいたり、幕府の蕃書調所に縁をつくったり、海外から送還される漂流者の宿を尋ねたり、要するに書齋の中だけではことが足りず、たいへんな苦心をじて英語を勉強しています。そのとき英語で「一番六かしいと云ふのは発音」と後に述懐しているのは、全くその通りでありましょう。福沢が横浜に行ったのが26才(1859)のときでしたが、翌年の万延1年(1860)1月には威臨丸に乗り組んでアメリカへ渡っています。そして同じこの年の8月には『増訂華英通語』という英語の自習書のようなものを出しています。これは名前からもわかるように、中国で出た原本に、仮名をふったり、日本語で訳文を入れたりしたものです。蘭学という下地はあったにせよ、英学にとりついて、その翌年にはもうこういう本を出しているのは驚くべきことでしょう。今から百年前に福沢諭吉が語学の上で大きな方向転換したこの事実は英学の歴史の上において見のがせないことで、ともかくわが国の洋学の路線の上で蘭学から英学へとスイッチが切り変わった時期を示しています。

幕府のほうでも洋学の意義を大いに認めざるを得なくなって、安政の初めに洋学所を作っています。この洋学所はいろんな名前に変わり、次に蕃書調所(安政3年, 1856)、洋書調所(文久2年, 1862)、開成所(文久3年, 1863)と頻りに改名しています。洋学所の流れをくむ開成所では、洋学を教えたり、海外の文献を調べたりしました。開成所を出した、堀達之助、ほか編『英和対訳袖珍辞書』[文久2年(1862)]は「枕

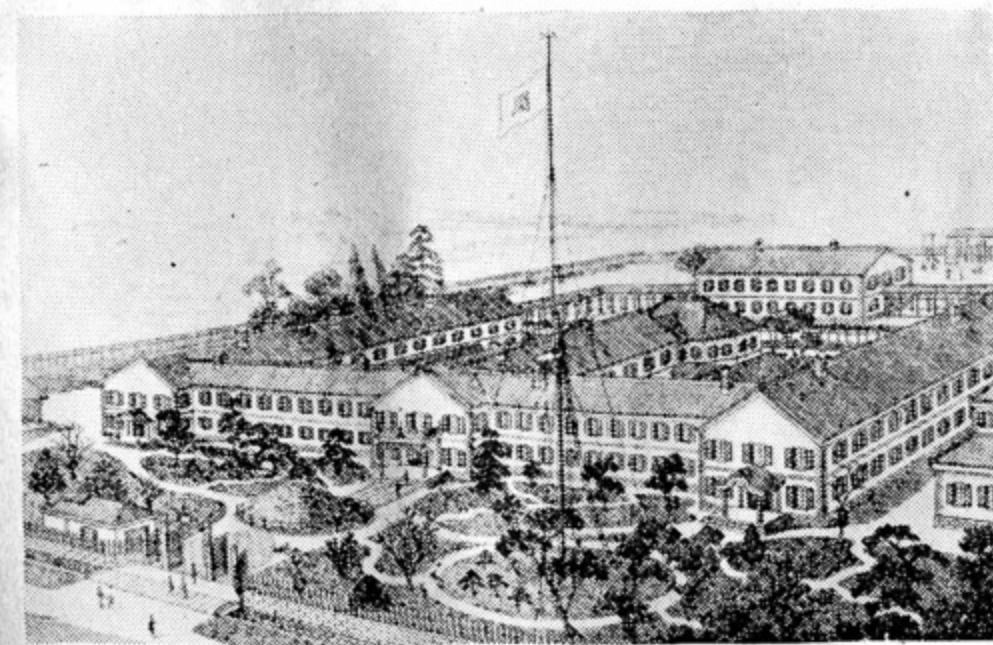
辞書」の愛称で有名ですが、これは国定の辞書といったものでしょうし、また翻刻ですが、英語の入門書なども出しています。国定教科書のはしりといったものでしょう。

開成所は明治維新になると開成学校となり、さらに大学南校と変わり、その後一時大学が廃止になりました。初めの大学南校には今の文部省に当たる内容も含んでいたのですが、そこから文部省が飛び出して、その後はただの南校となっています。前に述べた桜井博士のはいられたのは大学南校の時代でした。さらに明治7年には元の名称に近い東京開成学校と改称し、明治10年4月にやっと東京大学(その後、二、三回名を変えています、これは奇しくも現在と同名)という名になっています。その後の名前の変化には触れませんが、これまでの改名だけでも七変化以上です。しかしいづれにせよ東京大学は系譜的には、その一つの流れとして洋学所のと受けついでいるのです。その建っていた場所は初め神田にありましたが、後に、先にお話しましたように本郷の前田家の上屋敷の跡に移りました。

英学の流れをもしお話するとすれば、こ

のほか外国人宣教師とか、海外で勉強した日本人帰朝者のこととか、まだいろいろのことがあります、それはここには述べません。しかし以上のことからでも徳川末期から明治初年にかけて、洋学——初めは蘭学、後に英学——がわが国の成長しようとする知識欲と、築こうとする新しい文化への窓口であったことがわかります。当時英学を勉強する学生は、名実ともに社会の指導者たる意識がありました。要するに当時の英学とは、英語学とか英文学とか英語教育という専門分科に分かれたものではなく、英語を通じて外国、特に英米の学問文化に接したいという行き方でした。だから英学者というのは英文学者とか英語学者というのではなく、英国の法律、英国の経済事情、あるいは英国の社会思想など英国の文化的なものに接し、それを吸収するために英語をやった人のことです。洋学という名は漢学にならってできた言葉であると、前に申しあげましたが、これから蘭学、英学という名が作られました。これ以外の国、たとえばドイツ(独逸)に対して独学(?)、デンマーク(丁抹)に対して丁学(?)なんていうことはなかったようです。

そういう英学者の態度について思い出すのは、前にも述べた桜井博士が、昭和12年(1937)に母校ロンドン大学のUniversity Collegeの名譽評議員におされ、同大学から招待を受けたときに話された演説の中で、自分が若いころロンドンに留学した当時のことを懐古して述べておられることです。当時はヴィクトリア朝



(開成学校鳥瞰図)

の最盛期でした。福原麟太郎博士も英国の一番盛んな時代はおよそ 1870 年と考えるとおられますが（『日本の英学』）、桜井博士も “The five years of my student life in England were in the latter half of Queen Victoria's reign, a period which is one of the most glorious in the whole history of England” (Speech at University College, Fellows' Dinner, 30th April, 1937) と回想しておられます。そういう情勢の中で、桜井博士が勉強されたのは、専攻の化学だけを馬車馬のようにコチコチになって取組まれたのではなかったようです。桜井博士の言葉によると、——

Having had the rare fortune of being in England at such a glorious time, I could not and would not confine myself to scientific studies alone, but wishing to look upon England with more widely opened eyes I studied something of English History, of English Literature, of English Art and, even, of English drama. At the same time, I had the great good fortune of making some very dear and life-long friends and, through them, of knowing something of English homes and of mixing more or less in English society, all of which combined in enabling me to get a fairly accurate idea of English culture, and it was this — the knowledge of English culture — which has proved to me to be of inestimable value throughout the whole of my later life. (*ibid.*)

要する専攻の部門はもとよりですが、それだけに止まらず、英国の文化全般にわたって広く関心を懐いて勉強されたことを述べておられます。

現在ではますます専門が深くなるとともに、専門分野が細かくなって、医学のほうを例にとっても、あるお医者さんは心臓の

どこそこの血管の何とかいうことだけは世界的権威だが、ほかのことは目のことも耳のこともどうもよくわからないとか、数学のほうでも、だんだん専門が分化して専門化するとお互いに共通の言葉が少なくなってしまうようです。少し皮肉な見方をすると、わが国では自分の狭い専門以外のことは知らないほうが、あるいは知らないことをひけらかしたほうが、深い偉い学者だと世間からは尊敬される傾向すらないとはいえませんが、英語のほうでも、英文学、アメリカ文学、英語学、英語教育などの中で最近専門の分化がますます進んでいって、細かい深い研究が見られるようになり、たいへん結構なことですが、その半面同じ英語をやっている方面の違う研究をしている者同志ではどうもあまりよくわからないということもあるようです。ここで参考にしていいのは、今度アメリカから日本駐在の大使として来られたライシャワさんのことです。その本来の専門は聖徳太子のころの日本史だということですが、しかし日本に対する研究は何も狭い一つのことに限ったものではなく、もっと広く日本の歴史から社会、日本人の心理、国民性といったものを大きく対象としておられるのではないのでしょうか。Sinology という学問はシナ学、つまり中国文学、中国哲学、中国の歴史などをすべて含んだもっと広い総合的な研究ですし、Egyptology は古代エジプトの文字、歴史、文化、遺跡などをすべて総合した研究の名称です。

こういういき方に比べますと、英語のほうは今も述べましたように、たいへん細かく分かれていて、非常に深く突っこんだ労作がみられるのですが、一方大きくつかんでいくということが少なくなった嫌いがないのでしょうか。専門に細分化するということは、けっして悪いことではなく、それだけ学問の研究が進んだことを示しています。

しかしその長所とともに、反面それに伴う欠点が頭をもたげることが警戒すべきです。つまり末端ともいべき細かい研究に専念するあまり、そこだけにとらわれて、木を見て森を見ずという弊がないか、が憂えられる次第です。

かつて市河三喜博士は外国語の勉強には三つの L が必要だ、ということをおっしゃいました。つまり Language と Literature とそれに Life の三つの L です。この三つに対してともに円満な勉強が進められないと、ほんとうの意味での外国語の研究は望めない、ということだと思います。（それこそ Love's Labour's Lost ではなく、Language's Labour's Lost になり兼ねません。）この Language と Literature のことについては何も申しあげることはありません。も一つの Life が実は外国文化の研究に対する底辺となっている事実を、とすれば軽んじていることがないでしょうか。Life とはその民族、国民の広い意味での生活、つまり国民性とか、歴史、社会、精神、伝統などをすべて含んだことです。Language といい、Literature といい所詮この Life から生れてたものです。ですから欧州大陸における外国語・外国文学研究——たとえばドイツの大学における英語・英文学研究を例にとっても、アカデミックな英語学・英文学の講義以外に実用的会話などに一方では重きを置くとともに、他方英国の社会史、政治史、地誌 (Landeskunde) の類を必修にしています。つまり Life を基盤にしてゆるがせにしない態度です。

最近わが国でも area study というものが問題になってきました。東大では教養学部の教養学科のいき方がこれに即していま

す。つまり英国なら英国というものを、多角的といいますか、広角的といいますか、広く大きくつかんで、その一つの現象として言語にしろ、文学にしろ見ていこうというのであります。（さきに述べた Egyptology や Sinology もこのいき方です。）こうすれば研究がどれほど深く細かくなっても中心を忘れ、浮き上がるようなおそれはありません、常に核心となる点は踏まえているのですから。——江戸から明治へかけての英学は当時の社会を背景として必然的に生まれたもので、それがいくらリバイバルの波に乗ったとて、今さらそのままの姿で復活するとは考えられませんし、またその必要もありませんが、現在要望されるのは現代版の英学——つまり英米文化一般に対する総合的な研究、その Life をもないがしろにしない中広い関心、——こういうふうに変えて英学がリバイバルすることは、英語、英語学、英文学さらに英語教育を研究し、あるいは実践するわれわれにとって、大いに意味があることではなからうかと考えまして、以上はなはだとりとめもないことで恐縮でございますが、何かのご参考になればと思いご清聴をわずらわした次第でございます。

（昭和36年6月10日、本研究所主催・北陸英語教育研究大会が金沢大学文理学部講堂で催されたときの講演筆記に加筆したものである。）

